

Proposing synchronous oligometastatic non-small-cell lung cancer based on progression after first-line systemic therapy

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2022-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 太一 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002775

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2488 号

Proposing synchronous oligometastatic non-small-cell lung cancer based on progression after first-line systemic therapy

初回治療後の病勢増悪形式に基づいた非小細胞肺癌における Oligometastasis の転移個数の検討

宮脇 太一 (みやわき たいち)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、Oligometastasis を伴う IV 期非小細胞肺癌は、初回化学療法後に既存病変のみ増悪する症例が多く、局所治療を追加する根拠の一つとなっていることに着目し、初回化学療法後の増悪形式に基づいた ROC 曲線から Oligometastasis の閾値となる転移個数を検討した。175 名の患者を対象とした ROC 解析の結果、曲線下面積は 0.91 となり、既存病変のみの増悪を予測する感度と特異度は転移数 3 個をカットオフとした場合に最も高かった (感度 85.9%, 特異度 97.3%)。この結果に基づき、対象患者を Oligo 群と non-Oligo に分けた。年齢、性別、喫煙歴、組織型、PS、N 因子、T 因子を含めた多変量ロジスティック回帰分析では、Oligo が既存病変の増大のみでの病勢進行を予測する唯一の独立した予測因子であることが判明した (オッズ比 165.7、 $P < 0.001$)。さらに、全生存期間の中央値は、Oligo 群および非 Oligo 群の患者で、それぞれ 23.0 カ月と 10.9 カ月 (ハザード比、0.51、 $P < 0.001$) となり、Cox 比例ハザードモデルを用いた多変量解析では、Oligo が有意な予後良好因子であった (ハザード比 0.51、 $P = 0.001$)。本研究は、初回治療後の病勢進行形式に基づき、Oligo を伴う IV 期 NSCLC の定義として、科学的に合理性をもって転移個数 1-3 個が適当となる可能性があることを初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。